

# 氣仙新聞

第2号

発行

岩手県大船渡地方振興局

〒022-8502

岩手県大船渡市猪町町字前田6-1

TEL.0192-27-9911

FAX.0192-27-1395

http://www.prefiwate.jp/~hp4501/



※気仙新聞第2号は「移住・定住・交流」をテーマに制作いたしました。全国に七〇〇万人いるといわれる団塊の世代ですが、多くの人たちが地方への定住を希望しているというアンケートがあります。岩手県の気仙地方は「リアス式海岸」の美しい景観と三陸沖の世界的な漁場に恵まれた温暖な地。本紙が「第二のふるさと」との出会いのためにお役に立てば幸いです。

## 自分の中の少年少女と出会う

### 海山川里が多彩な自然が夢を叶える

ふと気づくとこの気仙地方にはたくさんの移住者が住んでいます。その人たちに共通するのは、「仕事中心モード」から「自然や地域との共生モード」への切り替えを上手に楽しんでいること。温暖な気候に加え、海・山・川・里の自然や食べ物が豊富な気仙地方には、眠っていた「少年少女の遊び心」を呼び覚ます不思議な魅力がたくさんあるようです。

### きっかけは次男の大学

十年ほど前、神奈川県から大船渡市の三陸町越喜来（おきらい）に移り住んだ大森邦男・桂子さんご夫妻。ご主人は国内大手の出版社に勤務し、奥さんは日本画家のご夫妻。第二の人生は海見える土地で「農的生活」を試みたい、という夢をこの地で実現しています。

三陸町に移住したきっかけは、次男が北里大学水産学部に入学したことでした。北里大学の水産学部は三陸町の越喜来にあり、周りは景勝地に囲まれています。何度か夫婦で次男のアパートを訪ねているうちに移住を決心。定年まで五年残した十年前に今の場所を探し出し、移住してきました。一千七百坪あるという土地は越喜来湾を遙かに望み、夢見ていた絶景そのものだったといえます。

三陸町での邦男さんの毎日は、趣味の域を遙かに超えた農園づくりと

カメラ。畑仕事の側には愛用のデジカメを置き、農園に訪れる蝶や蛾をとり続けています。昨年には三陸地区文化祭に写真を出品して好評を博しました。

### 想像以上の楽しい毎日

苗作りから育てるといふ野菜は、白い茄子や珍しいズッキーニなど。奥さんが描く日本画のモチーフに使われたり近所に配ったりしています。「近所の人たちにおすそ分けすると、ホタテやホヤなどになって戻ってくるんです。この生活は想像していた以上に楽しい毎日です」と二人は満足そう。

一方の桂子さんは、毎日、日本画制作に打ち込んでいます。ご主人がつくる野菜やご近所からもらう魚介類など、桂子さんにとってどれも想像力をかき立てる題材になっている様子。平成十四年には二人の知人と共に自宅脇のギャラリー「壺中天（こちゅうてん）」で三人展を開き、今年九月には、銀座五丁目画廊・鳩居堂で個展を開催する予定です。

### 心開かれる三陸の自然

海・山・川・里が渾然一体となった三陸リアスの自然や地域社会は、大森さん夫妻にとっても心地向うところです。「ここは少年になれるところなんです。主人の顔を見ているとそれがよくわかります」という桂子さんの言葉に、気持ちが凝縮されています。悠々とこの地を楽しむご夫妻に三陸の海や草花がとってもよく似合っています。

風の人に土の人にまやましい風が吹く  
—ギュッと詰まった「リアスの恵み」がここにはあります—



大森邦男さん（昭和16年生まれ）・桂子さん（昭和22年生まれ）平成9年に神奈川から大船渡市三陸町に1ターン。三陸の海を望む地で邦男さんは野菜づくりとカメラ、桂子さんは日本画の創作に精を出す毎日を送っています。



毎日の食卓には旬の野菜がいっぱい



おすそ分けは「田舎の文化」です

地元で溶け込み自然体で暮らす 刃金さんご一家 (P.2)

ワンストップ窓口をつくって移住・定住のお世話をしている住田町役場 (P.2)

大森さん夫妻が住む 三陸町・越喜来 (P.1)

藤森さんがフラダンス教室を主宰する大船渡町 (P.3)

陸前高田市

全国から教習生が集まる竹駒町の 陸前高田ドライビングスクール (P.4)

就農希望者の支援をしている 「陸前高田市総合営農指導センター」 (P.2)

三陸の海の幸と浜の風情を体感できる 「長部の土曜市」 (P.4)

夏いちごの栽培を手がける 辻さんの畑 (P.2)

毎年飛鳥の「漁師さんとのふれあいツアー」が行われている赤崎町・長崎海岸 (P.4)

富山勝敏さんの喫茶店「h・イマジ」がある末崎町・碓石海岸 (P.3)

5つ星のオートキャンプ場 「モビリア」のある小友町 (P.4)



邦男さんが蝶を撮りはじめたのは数年前。冷夏で作物が全滅し、時間ができたのがきっかけでした。今では自宅の敷地内だけで68種類の蝶を撮影。70種類の蝶を目標にデジカメを持ち歩く毎日です。



「クジャクチョウ」



「キリタテハ」



桂子さんが日本画を志したのは高校生の時。以来創作活動を続け、東京の上野の森美術館での入選など活躍しています。今は山野草など、身近な気仙の自然を題材に創作しています。



屏風「華」



板絵「清香」

# 論説 地域が主役となる逆転の時代

つきお よしお  
月尾嘉男

世紀の転換とともに日本の社会にも巨大な転換が発生してきた。明治初期から三・五倍にまで増加してきた人口が減少に転換、地方分権一括法による中央集権から地方分権への転換、環境問題への意識向上による開発主義から保全主義への転換、労働時間の短縮による仕事中心から生活中心への転換、グローバルリズムの横行に対抗する西欧文化崇拜から伝統文化尊重への転換など、いずれも明治以来の百年単位の巨大な転換である。

これらは過去の中央偏重と地方軽視という潮流を逆転させる傾向であるが、それを後押しするのが、工業社会から情報社会への転換である。大量生産による製品を国民が購入する社会は全国に画一の価値を普及すると同時に、都会にヒト、モノ、カネを吸収する構造であった。しかし、同一の内容には価値がないという特徴をもつ情報が主役になる情報社会では、地域の固有の文化や風土が一気に注目されることになった。

そして均一かつ定額で利用できるインターネットが登場し、中央と地方という位置による格差や、人口の大小による規模の格差も大幅に解消される時代が到来した。例証するまでもないが、インターネットを駆使すれば情報の収集もモノの購買も生活場所に影響されず、情報を駆使する仕事であれば都会と同様の仕事ができる。これは地方にとって重要な意味がある。

開発よりは保全ということになれば、同工異曲の都会の風景よりは地域の多様な自然環境に価値がある。仕事よりも生活ということになれば、高額の賃貸で狭隘な住宅という都会の生活は魅力がない。伝統文化ということになれば西欧文化に懐柔された都会より出遅れた地域が宝庫である。要約すれば、社会の目指す方向の一八〇度の転換により、明治以来、社会の末尾で必死に追走してきた地域が、突然、先頭になったのである。

ここからが戦略である。この僥倖にニンマリして都会の苦勞を傍観することも方法であるが、寛容の精神で都会に地域の豊穡を配分することも方法である。そのためには自然環境、自然食品、伝統行事などに価値を見出す都会の人々を、短期の交流や長期の移住により歓迎することである。これは人口増加や経済発展という目先の利益だけではなく、異質の文化の出会いにより新規の文化が華開くことにも役立つ。

そして地域にとって重要なことは、あまりにも日常身近で気付かない地域の宝物を外部の視点で自覚することである。見慣れた三陸海岸は都会の視点では日本全国有数の景観である。食傷気味の山菜や海鮮も都会の人々にとっては礼賛する美味である。その価値を地域の人々が自信をもって自覚するとき、都会と対等以上の交流が実現し、自然として伝統を維持してきた百年の苦勞が本物の地方分権として結実するのである。

## 就農希望者のお手伝い

陸前高田市総合営農指導センターは、田圃や畑に囲まれたこのセンターは、新規就農者や後継者育成のための研修農場として平成十三年に開設されました。コースは「野菜」と「花卉」の二つあり、二〜三年間実際に育てながら経験を積みことができます。

入所中は多少ですが助成金が支給され、終了時には行政やJA等の関係団体が農地や資金の相談にも乗ってくれます。しかし入所中の生活費は自己負担なので、入所者の取り組みは真剣そのもの。一次産業を取り巻く環境は決して楽ではありませんが、土と共に生きてみたい、安心して安全な食料を自給したいという人たちに、とても頼りになる施設になっています。

陸前高田市総合営農指導センター  
電話〇一九二一五五五五五三三四



センターは就農希望者の頼りになる存在です

## 東京から「イターン」

～家族とのゆったりとした生活を  
住田町移住で実現～



刃金秀明さん、詩帆美さん家族

刃金（はがね）秀明さん、詩帆美さんご夫婦は、生まれたばかりの美水ちゃんとともに、今年の五月に東京から住田町に移住してきました。

経営コンサルティングの秀明さんは激務で家族との時間も取れない毎日だったとか。新しく生まれてくる子供のためにも、いつかは新天地に移住して、家族とゆったりと過ごせる生活をしたと考えていたそうです。

二十年来の趣味であるフライフィッシングで、岩手県には何度も来ていたという刃金さん。同じ趣味を持つ詩帆美さんにも、移住するなら岩手県と決めていたそうです。住田への移住は清流「気仙川」が決めた手だったのでしようか。

現在は地元森林組合に勤める刃金さん。畑の林業も自然体でこなしています。仕事が終わると町から回転された町営住宅裏の気仙川で存分に釣りを楽しむ毎日だとか。夢だった家族水入らずの生活を住田町で実現しているようです。

## 北海道から「イターン」

～いちご栽培の夢を  
陸前高田市で実現～



辻昌宏さん、めぐみさん家族

昨年四月に北海道札幌市から陸前高田市小友町に移住してきた辻さん一家は昌宏さん、めぐみさん、勇太くんの三人家族。「いちご栽培」の夢を陸前高田で実現させたいと気仙川に移住してきました。

もとは医療機器関係の仕事をしてきた昌宏さん。「いちご栽培」の夢を実現するため一念発起して退社を決意。いちご産地を訪ね歩いて栽培技術の習得に努め、ようやく新天地での生活にこぎ着けました。

移り住んで、早速3棟のビニールハウスを建て栽培をはじめたものの、昨年十二月の大風でビニールハウスが倒壊。心機一転2棟を再建し、夏に出荷できる「夏いちご」の栽培にチャレンジ。ようやく出荷できるまでになりました。

様々な困難に遭いながらも、いちご専業農家の夢を実現しようと頑張っている辻さん家族。勇太君が大きくなる頃にはきっと立派ないちご農家になっているに違いありません。

# ようこそ、移って住田い町へ

## 「住田町の取組」

岩手県住田町は面積の90%が森林の町。この住田町にとって、人口の減少は重要課題ですが、いち早く「ワンストップ窓口」を設けて、全国からの移住・定住希望者に喜ばれています。

### 林業を軸にまちづくり

住田町は人口六、六〇〇人の林業が中心の町。宮沢賢治の代表作「銀河鉄道の夜」の舞台にもなった種山ヶ原があり、豊かな自然を生かしたユニークなまちづくりを進めている町です。

たとえば「森の案内人」。ボランティアスタッフが、子供たちを森に案内して、自然を大切にする心と好奇心を育てています。

### 親身な対応窓口が好評

そんな住田町も人口の減少は悩みの種。そこでいち早く立ち上げたのが「ワンストップ窓口」です。



ワンストップ窓口担当の佐々木さん

また地場産業の林業を生かし、バイオマス・エネルギーで注目されている「ペレット」を製造。ペレットストーブを町の保育園や学校などに導入するなど、二十一世紀に相応しい環境に優しい町づくりを目指しています。



清流、気仙川は鮎釣りて有名



蔵が建ち並ぶ町並み

町づくり推進課 移住促進担当 (P.4参照)

「ふるさと回帰大船渡支援センター」平成十九年十月を目標に設立準備中  
本センターは、大船渡市への定住・移住を希望する人々へのサポートを主たる目的に、たぐいまれな準備中です。

ふるさと回帰大船渡支援センター  
〒〇三二〇〇四  
岩手県大船渡市猪川町字下権現堂十九ノ十四

## 移住定住の窓口です。いわて銀河プラザ

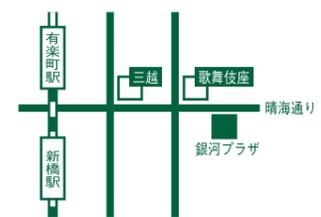
東京銀座五丁目といえば東京でも格式のある目抜き通り。そこに岩手のアンテナショップ「いわて銀河プラザ」があります。岩手県の産品と情報をワンストップで手に入れるにはここが一番。このプラザのお客様には岩手ファンの



人通りの絶えない銀座に岩手県の顔が



岩手からの産品はいつも大人気



〒104-0061  
東京都中央区銀座5丁目15-1  
南海東京ビル1F  
電話 03-3524-8282

いわて銀河プラザ <http://www.pref.iwate.jp/~hp0401/>

# 富山勝敏さん

とみやま かつとし (昭和十六年生まれ)

「ログハウスの喫茶店『h・イマジン』の店主・富山さんは平成十五年に東京から大船渡市末崎(まさき)町にイターン。三陸海岸の風情とお客さまとの一期一会を楽しむながら気仙に暮らす根っからの自由人です。



木立に囲まれ落ち着いたたたずまいのログハウス



ジャズが静かに流れる店内にはグランドピアノと薪ストーブが



夢を語る富山さんは年齢を感じさせません

## 『h・イマジン』からのメッセージ

陸中海岸国立公園の碁石海岸は、大船渡市を代表する風光明媚な景勝地。その松林の中に富山さんの喫茶店があります。店と住居を兼ねているカナタ製のログハウスに入ると、薪ストーブとピアノ、そして沢山のレコードやCDがおかれ、カウンター越しには富山さんの温かな姿が見えます。

店内に広がる音の響きがとても柔らかく人間的なのは、ログハウスを組んでいる丸太もさることながら、富山さん自身が醸し出している響きのように感じられます。この店の名前は『h・イマジン』。ローマ字で読んでみると『ヒマジン』とも読めます。「三陸海岸の一番の宝物はゆつたりとした時間。それをめいっばい楽しもうよ」という店主からのメッセージにも読めます。

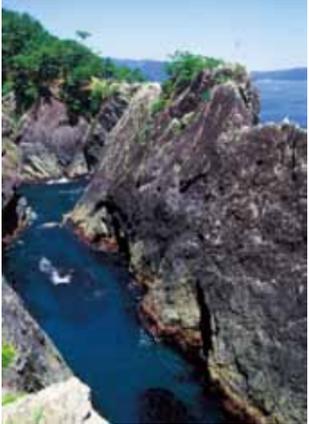
## モード切り替えの妙

富山さんが大船渡に移住してきたのは四年前の平成十五年。東京多摩市に住み、リゾート開発関連の会社に勤めていました。仕事柄、全国を巡り歩いたといいますが大船渡には来たことがなかったそうです。

その富山さんが第二の人生を楽しむた



波の音を聞きながらの散歩



風光明媚な碁石海岸は見どころいっぱい

喫茶『h・イマジン』電話 0192-29-2554

## リアスの潮風とフラダンス

### 藤森文恵さん

生まれ故郷の気仙に戻ってフラダンス教室を主宰する藤森文恵さん。昭和三十二年に気仙郡住田町で生まれ、その後東京の総理府に勤務しながら人形劇団の活動に参加。東京で知り合ったご主人と共に故郷に戻ってきました。

牡丹雪が空から降る様子を表現した舞の人の手話に感動。フラダンスの中に手話の要素が深く流れていることを知りフラダンスを学び始めたとか。その後「フラ・ハラウ・カフラ・オ・ハワイ」の窪川京子さんの踊りに感動し、その感動と楽しさを伝える事ができればと教室をはじめたそうです。

「自分の子どもたちは気仙を離れていますが、自然豊かな故郷を持つ子や孫は幸せだと思います」という藤森さん。その藤森さんのフラダンスがこの気仙で少しも違和感を感じないのは、リアスの潮風のせいでしょうか。藤森さんはまるで一輪のハイビスカスのように凛として美しく踊っています。



笑顔で語らう藤森さん

## お祭り三陸旅①

### 「あわびカレー」

三陸の浜辺を歩いていると、なじみの漁師さんから声をかけられる。「おい、今日はカレー作るけど、お前らも食うか?」

なぜ漁師さんからカレーがおすすそ分けされるのか解らないまま仕事場に戻る。しばらくして届けられたカレーには、肉の代わりにあわびが贅沢に入っている。騒然となる社内、食事時でもないのに、皆が食堂に集まってくる。

「高い肉を使うより、この時期は、あわびカレーだな」

時期はあわび漁最盛期、浜人の「粗食」に、舌鼓を打つ。



(このシリーズでは、「三陸とれたて市場」八木健一さんが、「三陸の潮風の香り」の「h・イマジン」を「あわび」で紹介).

## 気仙 金山 昔語り

十六世紀半ばまで気仙は世界でもっとも金の産出する地帯でした。気仙の金は奥州平泉の黄金の「東方見聞録」によってヨーロッパに伝えられました。気仙には金にまつわる昔話もいっぱい残っています。今回はその中から「炭焼き藤太」をご紹介します。

文 ● 金野静一  
絵 ● 庄司暁子



### ■ 稲子沢長者 ■

昔、気仙の日頃市に、どこからか若い夫婦が来て、ここで暮らすことになった。

二人とも正直で、気だてのいい人だった。里の人々からも好かれていた。ある年の元日に、夫婦あ全く同じ夢を見たんだ。それは、

「ある館の跡に、三十三の花のついた白百合があつたら、それを採って根元を掘ってみれば、宝ものが埋まっている。」

「って、夢だった。たいへん喜んだ夫婦は、さっそく身支度をとどえ、その花を見つけようと旅に出たんだ。」

あつちやこつちや探して二人あ、胆沢の永岡の生城寺館に着いたのは、ちょうどその年の暮れ近かった。館へあがつて見たれば雪の時節なのに、夢で見た三十三の花房のついた百合の花が咲いていたんだねあ……。

夫婦は、うれしくて我を忘れて根元を掘ってあげれば、土の中から沢庵石くらしいもあるような黄金の玉が七つも出てきたんだ。二人あ、喜んで気仙に持ち帰ったが、これが元手になって「奥州の稲子沢」って語られるほどの大長者になったんだ。

稲子沢は、今は猪川の久名畑にその子孫がいるけど、その昔はなんと十八万石の大名にも比べられるような大長者だったんだ。

とんどはらえ。

## 「平泉の文化遺産」を世界遺産に

平泉の文化遺産は「平泉の文化遺産」は平成二十年の世界遺産登録を目標として活動しています。



http://www.watetabi.jp/watetablnow/bunkaisan/

# 気仙とともに

[No.02]



陸前高田ドライブイングスクール株  
代表取締役社長  
田村 満さん

### 気仙の自然を体感しながら 免許を取ろう！

気仙地方には岩手県一の入校生を誇る自動車学校があります。合宿教習を通して、雪が少なく海・山・川・里の自然いっぱい、気仙を都市圏の若者たちに満喫してほしいと努力を続けた結果、いつの間にか県内一になったと田村社長さんと言います。



## 少子化で入校生が減少

陸前高田ドライブイングスクールは岩手県の最南端のまち陸前高田市の自動車教習所です。昭和四十三年に先代の社長である田村さんのお父さんが創立して以来三十九年になります。ところが、少子化とともに入校生が減少。田村さんは十八年後に入校生になる地域の出生数を分析し、このままでは先細りと考え、合宿教習に力を入れました。

## 「合宿誘致」がヒントに

合宿教習は今でこそ当たり前ですが、当時の取り組みは県内でも最初の頃でした。それというのも「岩手の湘南」とよばれる気候の良さを売りものにして、大学運動部の合宿誘致運動を成功させた地元の先輩たちの実績があったからです。

田村さんが合宿教習を始めたのは平成九年です。今年でちょうど十年目。今では年間一、三〇〇〜一、四〇〇人の合宿生がこの気仙を訪れるようになりました。

## 「地方」を短期間に体験

毎年増え続ける首都圏からの若い合宿教習生をみるにつれ、田村さんは「十八から二十才くらいの多感な青年達が、毎年たくさん首都圏からこの気仙地方にやって来る。その青年たちに、普段の生活では味わえない多様な自然や文化を体験してもらい、ローカルな生活や地元の人たちとのふれあいを体験し



明るい田村さんは教習生の人気者



笑い声が絶えない食事時



合宿教習専用ペンションも2棟完備

## 長部土曜市

陸前高田市の広田湾漁協では、春から秋にかけて毎週土曜日に気仙町の長部（おさべ）漁港で「土曜市」を開催しています。水揚げされたばかりの新鮮なホタテやカキ、地元でしか食べられない小魚類等を目当てに、地域の人ばかりではなく観光客も買い求めにやってきます。販売が始まる前からお目当ての品の前に並んで、販売開始とともに買うのは、買いたれた地元の人。三陸海岸の風情が味わえるこの「土曜市」。気仙に来たならばぜひ一度行ってみたい所です。



開始と同時に飛びように売れる海産物

## 5つ星のオート・キャンプ場「モビリア」

陸前高田市のオート・キャンプ場「モビリア」は全国に十カ所、東北では二カ所だけという日本オート・キャンプ協会認定の5つ星の高規格キャンプ場。多彩で地方色豊かな企画も好評で、人気上昇中のスポットです。

陸前高田市の広田半島に位置する広大な土地を利用した「モビリア」は平成十一年にオープン。日本オート・キャンプ協会から立地の良さや、施設、サービス、アメニティーの総合評価で「星5つ」といううれしい評価をもらい、全国規模のオート・キャンプ大会も開催するなど、有数のオート・キャンプ場として知られています。

毎年全国から約二万人もの利用者があり、その約四割が関東圏からのお客様。三十代、四十代の家族がその大多数を占めています。この「モビリア」は立地の良さもあってか、最近では長期滞在のキャンパーが増えています。メインはやっぱり夏休み。朝食を食べると近くの海水浴場で存分に海を楽しみ、日が沈む頃には近くの日帰り温泉へ。お風呂上がりに地元の店で新鮮な海の食材を仕入れ、キャンプサイトでおさしみやバーベキューを食べる。こんな楽しみ方が自在にできるのが、キャンパーたちにはたまらないようです。

「モビリア」の楽しさは夏だけではありません。「5つ星」にふさわしく、通年で楽しんでもらえるような様々なメニューが企画されています。大晦日から元旦にかけての年越しキャンパーのための「餅つき大会」、青年農業者と交流しながらの「田植え体験」、漁師さんと作業する「牡蠣むき体験」等々、この地方ならではの豊富な体験メニューが人気を呼んでいます。

また周辺には温水プールや博物館など雨の時でも子供たちを飽きさせない施設が整っています。こんなところも人気の秘密かもしれません。



一生懸命に牡蠣むき体験



笑顔が絶えないキャンプサイト

この次の家族旅行のために、一度ホームページをのぞいてみませんか。

オートキャンプ場「モビリア」  
電話 0192-571-0110  
<http://www.southern.jp/mob/>



緑に囲まれ広大な敷地のモビリアは、サイトものびのびサイズ

### Topics

## 旅を楽しむドラゴン・レール

JR大船渡線は岩手県の一ノ関駅と大船渡市の盛（さかり）駅を結ぶローカル線です。「ドラゴン・レール」の愛称で呼ばれ、名前の通り龍のように曲がりくねりながら山間や海辺を走っています。



キャンペーンで走る「レトロむろね号」

ゆつくりのんびりと走るこの大船渡線。仕事で乗るにはちよっと不便ですが、「旅」を楽しむには極上の乗り物。母親に手を引かれた小さな子供。背中に荷物を背負って行商に向かうおばさん。忘れかけていた心の景色に、出会いながら、きつと優しい自分にもどれる汽車の旅になるはず。

### Topics

## 漁師さんとのふれあいツアー

日本一の豪華客船といえば昨年就航した「飛鳥II」ですが、「飛鳥II」は「飛鳥」の時から通算して二十回も大船渡港に寄港しています。人気の理由はたくさんあるようですが、入港の時の美しい湾の景色や地元の人たちとの素朴な交流、そして美味しい海の幸が魅力のようです。



漁師さんと一緒に記念写真

これらを一度に満喫できるのが、飛鳥のオプションツアー「ツアーで人気の「漁師さんとのふれあいツアー」。方言での素朴なもてなしと、三陸の新鮮な魚介類を楽しむこのツアーには毎年約100名に参加する乗客もたくさんいます。

## おらはの「ケセン語」①

言葉と誇り

気仙地方の言葉を「ケセン語」といいます。「気仙方言」とはいわずに、自らの言葉に誇りを持って「ケセン語」と呼びます。名付け親は地元で医院を開業する山浦玄嗣さん。「ズーゾー弁で話そうとも、清らかで素直なやさしい心から発する言葉はたとえようもなく美しいのです。おのれの中に価値を見いだすこと。これがケセン語の心です」と山浦さんはいいます。

### 【編集後記】

◆住民パワが結集し、お祭り一色に彩られた夏も終わり、そろそろ夜に秋の気配を感じる気仙地域から、創刊号に引き続き「気仙新聞第2号」をお届けします。◆「ふるさとへの山に向かい言うことなし ふるさとへの山はありがたきかな」は、岩手の生んだ天才歌人石川啄木の作品です。啄木は、寺の住職だった父の不幸により、石をもて追われるごとくふるさとを離れたにもかかわらず、このような思いを抱き続けていた由、やはり「ふるさと」は誰にとってもかけがえのない大切なものなのですね。◆一方で、「ふるさとは遠きにありて思ふもの」という、詩人、小説家として有名な室生犀星の句もあります。本人は文壇に名を轟かすようになった後も金沢にはほとんど戻ることがなかったそうです。もともこの句の続きをみると、犀星も生活困窮の極みの中で、ふるさとは受け入れられなかったという事情はあるようですが。◆国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によると、30年後の岩手県の人口は約25%減、気仙地域はそれを上回るスピードで、減少することが懸念されています。啄木や犀星の頃とは、交通手段も格段に進歩した現在、遠くの地から思いを馳せるだけではなく、気候の温暖な気仙との2地域居住など、新しいライフスタイルも御検討くださいませ。



【気仙新聞 第2号 発行:平成19年9月10日】

### 岩手県気仙地方への移住・定住などのご相談は 下記の窓口までお問い合わせください。

- 岩手県の総合窓口「定住・交流サポートセンター」  
(岩手県地域振興部地域振興支援室)  
電話 019-629-5194 (直通) [http://www.pref.iwate.jp/uji\\_turn/](http://www.pref.iwate.jp/uji_turn/)
- 首都圏での総合窓口「いわて定住・交流支援センター」  
(いわて銀河プラザ Uターンセンター内)  
電話 03-3524-8282 <http://www.pref.iwate.jp/hp0401/>
- 大船渡市の窓口「企画政策部企画調整課」  
電話 0192-27-3111 <http://www.city.ofunato.iwate.jp/>
- 陸前高田市の窓口「企画部企画政策課」  
電話 0192-54-2111 <http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/>
- 住田町の窓口「町づくり推進課 移住相談窓口」  
電話 0192-46-2114 (直通) <http://www.town.sumita.iwate.jp/>

### ちょこっとプレゼント

読者の皆様から気仙新聞への感想やご意見を募集しています。ハガキまたは封書に「ちょこっとプレゼント応募券」を貼ってお寄せください。お寄せ頂いた方の中から抽選で10名様に、気仙が誇る三陸銘菓「かもめの玉子」をプレゼントさせていただきます。(第2号の〆切は2007年11月30日です)

### 【応募先】

〒022-8502  
岩手県大船渡市猪川町字前田6-1  
岩手県大船渡地方振興局  
「気仙新聞」係

